

魔法の宿題 プロジェクト 活動報告書

報告者氏名: 江川悠介 所属: 秋田県立秋田きらり支援学校 記録日: 2016年2月22日

キーワード: 『進行性筋ジストロフィー症』

『肢体不自由』、『教科学習(意欲)』、『社会生活(学校生活)』、『負担軽減』

学校生活に関する様々な場面での負担軽減を目指す

体の理解とそれに必要なツール(ICT)を自分自身で考える

【対象児の情報】

・学年: 中学部2年生

・障害名: 進行性筋ジストロフィー症

・障害と困難の内容

- ① 進行性なので、少しずつ自力での身辺処理が難しくなっている。それに伴い、登下校時の着替えやバッグの準備、学習の前後では、電動車椅子のコントローラーの上げ下げなど、毎回誰かに依頼して行わなければならない。また、授業中の地図帳や辞書を使用する際にも消極的な姿が見られた。
- ② 自分の持ち物を失くすことが多い。(問題集や過去のテスト問題など、管理することに手間と時間と筋疲労が発生するため避けていたと考えられる。)テスト勉強については、勉強したいワークを準備したり、調べものに手間を要したりするため、「教科書やプリントを読んで終わる」というスタイルになりがちである。

【活動目的】

・当初のねらい: 学習環境の設定の負担感を軽減し、自ら学習に向かう習慣を身に付ける。

- ① 学習に必要な物を一人で準備することが難しいので、教科書やノートをデジタル化して、持ち運びや準備に際してかかる負担感を軽減する。
- ② 筋力維持に配慮し、自らの書字で字や絵を書く機会を確保する。
- ③ プリントや宿題等の管理が難しく、学習意欲とその結果へとつながらないので、家庭で簡単に準備と利用ができるiPadを使い、継続的に家庭学習を続けられるようにする。

・実施期間: 平成27年5月～平成28年1月

・実施者: 江川悠介(特別支援学校教諭)

・実施者と対象児の関係: 学級担任

【活動内容と対象児の変化】

・対象児の事前の状況

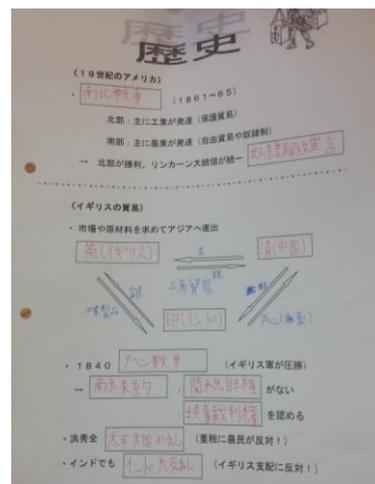
- ① 登下校時や学習の前後では、教科書やノートを机にスタンバイする時に、毎回誰かに依頼して行うという手間があった。また、授業中の地図帳や辞書を使用する際にも消極的な姿が見られた。
タブレット使用に関しては、他の生徒が通常の教科書を使用している中で、「自分だけタブレット(友達と違う物)を使いたくない」という主張が強かった。また、タブレットの持ち帰りについても抵抗感を示していた。
- ② 本人や保護者から「できるところは自分で行き、筋力維持を図りたい。」という要望があった。これまでも電動車椅子を手動に切り替え、自力でこいで進む場面や給食の下膳などを設定していた。
- ③ テスト範囲が「プリントから」と分かっているにもかかわらず、そのプリントを失くしていることが多かった。(1つのクリアファイルに全教科のプリントや学校行事のお知らせなどが混在していたが、分けて管理することに手間と時間と筋疲労が発生するため避けていたと考えられる。)
テスト勉強については、勉強したい教科のグッズを準備したり、調べものに手間を要したりするため、「教科書を読んで終わる」というスタイルになりがちであった。

・活動の具体的内容

- ① 毎日持ち帰っていた教科書・ノート類(6kgオーバー)を最小限にし、タブレットを持ち帰ることとした(1kg程度)。タブレットにデジタル教科書や辞書を取り込み、授業中や家庭での調べ作業をする時に、依頼せずに自力で準備や作業をできるようにした。また、ノートも教科ごとに5冊以上存在するので、インデックス付きのルーズリーフに切り替えて1冊を持ち歩けばよい状態を作った。
タブレットの持ち帰りについては、クラス全員(4人)で、タブレットを使用する場面を授業や休み時間に多く設定し、本人が違和感なくタブレットとの距離を縮められるようにした。
- ② 楽しみながら自らの書字や描画が継続できるように、文具に配慮しエアイン消しゴムや電動消しゴムなどを使用した。また、定期テストは自らの書字で受けているが、記号で答える問題を増やしている(主に社会科において)。週1回の自立活動の時間にも、担当の先生に協力してもらい、手指の運動を兼ねての工作や描画に取り組む年間指導計画を作成した。



自力書字の際の電動消しゴム使用場面



iPadに社会フォルダを作り、プリントを撮影したものを取り込んだ。(はじめは教師が持っているところを撮影)

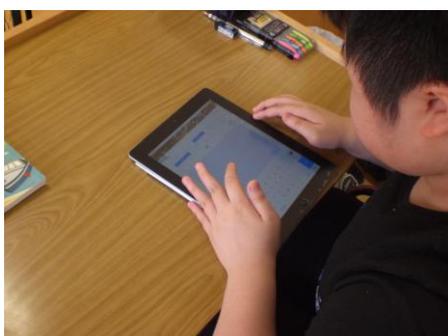
- ③ 家庭学習について、タブレットさえあれば復習やテスト勉強ができるように、問題集アプリやチェックシートアプリを取り込んだ。また、ノートテイクに負担感が出ないように、カメラ機能で板書を撮影しアルバム化した。

・対象児の事後の変化

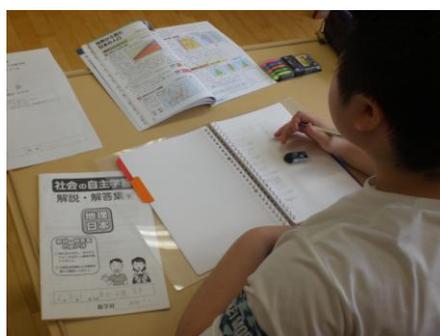
- ① 毎日持ち帰っていた教科書・ノート類が減ったことや、登下校のカバンの軽量化で保護者や周りの教師が喜んでいて、休み時間などを通して友達と一緒に iPad を利用して機器との距離感が縮まったことで、6月頃からあまり抵抗感なく iPad を家に持ち帰ることができてきた。

授業中は iPad のデジタル教科書を使用し、「準備が楽です」との感想があった。また、英語や国語では、辞書アプリを使用することにも慣れてきた。問題集のワークなどは教科ごとに数冊使用しているが、インデックス付きのルーズリーフに移行したため、机からの出し入れ回数は減少した。

- ② エアイン消しゴムや電動消しゴムなどの文具については、本人も楽しんで使用しているため、自力書字の場面は継続している。また、定期テストは記号で答える問題を増やしたので(主に社会科で実践)、周りの生徒と同じ時間内に終えることができています。定期テストの結果(アプリ等を実践している社会科)は少し上がっていたため、本人の学習意欲につながりつつある。



自ら辞書で調べることが多くなった



ノートを一元化できるインデックス付ルーズリーフ

- ③ iPad さえあれば、復習やテスト対策ができるように、問題集アプリや辞書アプリなどを取り込んだ。特に授業中の調べものではなくても、自分の好きなゲームに出てくる単語などを、気になった時にすぐ調べることが多く見られた。また、学習プリントを写真に撮ってアルバム化した。これにより、社会科のプリント整理の負担がなくなった。アプリでの練習問題はなかなか定着しなかった。代わりにプリントの重要語句をカメラ機能で撮影し、アルバムを作成したことは成果が見られた。

【報告者の気付きとエビデンス】

筋力の低下による日常動作の負担感を、iPad により軽減できたのではないか

- ① 周りの人への依頼が減り、学校での生活のしやすさを実感することで、自分の体を理解し必要最低限の支援を目指す姿勢につながったように感じる。

家庭学習の習慣化は難しかったが、より効率的な方法を自分で探す態度が身に付いたのではないか

- ② 学校の学習プリントと問題の出題形式がリンクしづらく、定着へとはつながらなかった。代わりにカメラ機能による「学習プリントアルバム化」や辞書アプリなどによって、自分なりの勉強方法を見付けることができた。



じしょ君

・国語辞典も入っているアプリ、主に英和辞書として使用。



中学歴史

徹底ワーク

・家庭学習用に取り込んだアプリ(習熟度や実態に合うものを見つけるのも重要)

・エビデンス

- ①勉強道具の机への出し入れを教師に依頼する回数が減少した。
- ②はじめは「みんなと違う物を使いたくない」とiPadを使いたがらなかったが、今では「iPadがないと困る」と話している。移動教室やノートテイク、自主学習に関しての負担軽減が実感できたことで、iPadの便利さへの信頼が増したと思われる。また、自分から「〇〇のできるアプリありますか？」とアプリのダウンロードを要求する姿が見られた。
- ③教科書を眺めるだけの勉強方法から、撮影した学習プリントの重要語句を確認するスタイルに変わってきた。
(社会科において)
- ④ノートテイクに時間がかかる友達の分も、写真に納めて見せてあげることがあった。(自分の負担が軽くなったため、友達のノートテイクの手伝いできた。)

・その他エピソード

- ①共有機能やメールを使ったやりとり(アプリの採点結果の報告など)は、本人の家庭での生活スタイルに適していなかった。しかし、iPadが身近な存在になり「なくては困る」ツールとして受け入れられたので、今後の勉強以外の分野(趣味のイラスト描画での使用や友達との通信手段)としてニーズが出てくると理想的である。
- ②iPadだけではなく、タブレット使用に関わる学校生活の過ごしやすさや周りの支援者の負担感の変化を本人と確認しながら進めることで、今後高等部進学へ向けての自身のICTの使い方(自分から「これがあれば便利です」や「この機器が使いたい」などの要望が出てくることが望ましい。)について考えることができるようになればよいと考える。今後の自分の体への理解を促進して、自立活動においても近い将来を見据えたICT活用を教師と話し合っていきたい。
(支援者を呼ぶ機能や書字が難しくなった際に使用できるアプリなど)